

(63)

氏名(生年月日)	ヤマダケイコ
本籍	
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第815号
学位授与の日付	昭和62年3月20日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	甲状腺腫瘍の超音波診断 一特に乳頭癌と濾胞癌の超音波所見について一
論文審査委員	(主査)教授 重田 帝子 (副査)教授 織畑 秀夫, 教授 渡辺 宏助

### 論文内容の要旨

#### 目的

甲状腺の結節性病変の治療方針を決定する際には、病変の良性・悪性の鑑別のみならず、その組織型を正しく判定することは重要なことである。本研究は、甲状腺の結節性病変の超音波所見と手術所見・病理組織診断とを対比し、特に乳頭癌と濾胞癌の超音波所見と組織型を中心にその関連性について検討した。

#### 対象および方法

対象は術前に頸部超音波検査を行ない、これと術中肉眼所見および病理組織との対比ができた(再発症例を除く)甲状腺腫瘍232症例247病変および腺腫様甲状腺腫51例である。装置は、日立 EUB-25および EUB-40、東芝 SAL40A リアルタイム電子スキャンを使用し、5MHzの探触子で水嚢を用いた水浸法で行なった。超音波像上描出された腫瘍像については、腫瘍の形態を整・分葉状・不整の3つに分けた。腫瘍の辺縁に沿った低エコー帯(ハロー)の有無を検討し、腫瘍の内部エコーについては、嚢胞性と充実性に分けた。なお、充実性の腫瘍では、充実性の部分の内部エコーを均一・不均一に分けて観察した。さらに腫瘍内の石灰沈着の有無について検討した。

#### 結果および考察

(1) 超音波所見で、嚢胞性・充実性のいかんを問わず形態が不整なもの、および充実性、形態分葉状で石灰沈着を伴うものを悪性とした場合の正診率は89%であった。

(2) 乳頭癌90病変中、嚢胞状の変化の全く認められ

ない76病変では、64病変(84%)で形態が不整、62病変(82%)で内部エコーが不均一、47病変(62%)で石灰沈着がみられ、他の組織型の病変に対して特徴的であった。嚢胞状の部分をもった乳頭癌14病変のうち10病変では形態不整な充実性腫瘍の辺縁に嚢胞状の変化がみられ、これは良性腫瘍の場合は形態整ないしは分葉状の腫瘍内部に嚢胞状の変化がみられたものとは対照的であった。嚢胞状の部分をもった乳頭癌14病変のうち3病変では隔壁様構造をもつ多房性の嚢胞性腫瘍を呈し、その辺縁ないしは内部に形態不整な充実性腫瘍がみられた。

(3) 濾胞癌は超音波所見上、濾胞腺腫および腺腫様結節との鑑別が難しかったが、幾つかの注目すべき所見がみられた。すなわち、濾胞癌18病変中16病変は全くの充実性で、2病変での腫瘍の内部にごく小さな嚢胞状の変化を認めたのみであるのに対して、濾胞腺腫および腺腫様結節では高率(37%、47%)に大きな嚢胞状の変化がみられた。形態は18病変中14病変(78%)が分葉状で、濾胞腺腫および腺腫様結節に比べて高率であった。18病変中11病変(62%)に石灰沈着がみられ、濾胞腺腫および腺腫様結節に比べて高率に認められた。

#### 結語

超音波検査は、甲状腺腫瘍の良性・悪性の鑑別に有用であり、悪性腫瘍のなかでも乳頭癌の特徴的な所見がみられた。また、濾胞癌でも幾つかの注目すべき所見を認めた。

## 論文審査の要旨

甲状腺の結節病変の診断は、治療方針を決定する上に病変の良性・悪性の鑑別にとどまらず、組織型を正しく判定することは重要なことである。本研究は超音波診断に当って甲状腺腫瘍、特に乳頭癌と濾胞癌の超音波所見と組織型の関連性を明らかにしたもので、学術上、価値あるものと認める。

### 主論文公表誌

甲状腺腫瘍の超音波診断—特に乳頭癌と濾胞癌の超音波所見について—

日本医学放射線学会雑誌 第46巻 第7号  
23～38頁（昭和61年7月25日発行）

### 副論文公表誌

- 1) 原発性副甲状腺機能亢進症の超音波診断—腫大副甲状腺の局在診断を中心に—  
日医放線会誌 45 (9) 47～54 (1985)
- 2) 腹部管腔臓器の超音波診断の意義  
臨放 26 (6) 649～654 (1981)
- 3) 甲状腺（副甲状腺を含む）  
臨放 29 (11) 1161～1173 (1984)
- 4) エコー法の現況、副甲状腺疾患  
メディチーナ 22 (12) 2442～2446 (1985)
- 5) 超音波診断—最新の手技と読影のコツ—、甲状腺疾患  
治療 67 (3) 145～151 (1985)
- (6) 甲状腺癌におけるCTの意義—隣接臓器への浸潤について—  
日医放線会誌 45 (4) 16～21 (1985)